

小室直樹、色摩力夫著「人にはなぜ教育が必要なのか」総合法令出版、1997 年 11 月 25 日刊を読む

21世紀を生き抜くために 色摩力夫

1. (1) ①人間の社会にも「自己沈潜」と「自己疎外」のリズムがある。

②どちらが好ましい状況かは、一概には言えない。「自己沈潜」は、一見、閉鎖現象を起こす。

③そこでは、自分自身に沈潜し、新しい思想を生み出し、次の時代のために大戦略を用意するかも知れない。

④しかし、徒^{いたずら}に中にこもるだけで、自堕落^{じだらく}な甘い生活にふけるのかも知れない。

⑤「自己疎外」は、一見、自由闊達^{かつたつ}な風貌^{ふうぼう}を呈^{てい}する。

⑥そこでは、進取の気性に富み、海外に雄飛する状況かも知れない。

⑦しかし、粗野で侵略的な「再野蛮化現象」に陥るのかも知れない。

⑧いずれにせよ、これも程度と傾向の問題であって、多様で多面的な現実を如何に見るかの視点に依存する。

(2) ①歴史における「自己沈潜」と「自己疎外」のリズムは、全く正常な現象である。

②具体的に現象として現れる態様はさまざまである。

③例えば、わが国の歴史で、江戸時代が鎖国の時代であったことは周知の事実である。

④しかし、これを日本独特の現象として理解するのは誤りである。

⑤ましてや、異常な現象として見るならば、ものの本質を誤るであろう。

⑥古今東西を通じ、至る所で現れる正常な歴史のリズムとして、捉^{とら}える必要がある。

2. (1) ①わが国も、江戸時代という二百五十年あまりの「自己沈潜」期を経験し、明治維新により突如「自己疎外」の時代に入りました。それからの雄飛は言うまでもありません。

②そして、先の大戦における敗退という巨大なショックにより、今や、われわれ日本人の心理的構造は大きな変化を起こしたのではないのでしょうか。

③つまり、わが国もわずか百年足らずで「自己疎外」の時代を終えて、新しい「自己沈潜」の時代に入ったのではないのでしょうか。これがわが国の固有のリズムであるならば、文句の言いようはありません。

(2) ①そうであれば、今われわれ日本人は、その心の琴線^{きんせん}まで沈潜して、新しく偉大な文化を創造するチャンスでもあるかもしれません。

②遠い将来のための大戦略をじゅうぶんに練っておくチャンスとも言えます。

③ですから、もしわれわれ日本人が賢明であれば、前途洋々たる未来が待っています。

④しかし下手をすると、いたずらに自堕落に陥って甘い生活に浸り、経済的に富裕となっても精神的には荒廃して、身も心も台無しにする危険があります。本当に国が亡びるのかもしれません。

(3) われわれ日本人は、もっと巨視的長期的な文明論的思索の必要があります。これが、これからの教育のポイントの一つではないのでしょうか。

優者の責任を持った真の「エリート意識」の復権を

3. (1)①戦後の日本の社会は、エリート意識を持つこと自体が排斥され、悪と見なされてきました。
- ②これは端的に言って「社会」というものの自殺行為です
- ③なぜならば、「エリート」と「大衆」との二極分解は、社会の本質に根ざす現象だからです。
- (2)①現在、社会権力を握っている特定の「エリート」層が墮落しているのであれば、引きずり下ろして弾劾するのによいでしょう。
- ②「エリート」の資格を失ったのですから。
- ③しかし、「エリート」の存在自体を否定し、新しい「エリート」層との交代まで反対するのであれば、それは亡国の兆候です。
- (3)①「エリート」は、社会階級とは関係ありません。
- ②貧富とも関係ありません。
- ③ましてや、身分とも関係ありません。
- ④上流階級にも「エリート」がいるかもしれませんが、バカ息子、バカ娘がたくさんいます。
- ⑤彼らは「大衆」でしかありません。庶民にも「エリート」の素質を持つものが少なくないはずです。
- ⑥もちろん「大衆」も大勢いないはずはありませんが。つまり、「エリート」と「大衆」の区別は、「意識」の問題にすぎないのです。
- ⑦自分が自分で「エリート」になる決意をして、それに果敢に挑戦すれば、必要にしてじゅうぶんなのです。
4. (1)①では、「エリート」とは何なのでしょう。
- ②それは、一種の社会的な使命感を持つことです。
- ③自分の個人的な利害からすれば何もプラスにならないことでも、自分の属する社会のためにはせざるを得ないと思う何かを自発的に行うことです。
- ④断ろうと思えば簡単に断ることのできる社会的責務を、つまり余計な重荷を、百も承知で敢然と引き受けることです。
- (2)①社会の健全性は、そのようなエリートが少なからずいるのか、そのような人に対して一般大衆が敬意を払っているのかで測られます。
- ②もしそうであれば、それは、通常の健全な社会でしょう。
- (3)①ところが、もしその志を持つ人が少なく、しかも一般大衆がそれをキザな奴として排斥しているならば、それは紛れもなく病的な社会です。
- ②オルテガは、そのように病的に変質した大衆を「大衆人」と呼んでいます。
- ③これが「大衆社会」の病理なのです。現在のわが国の状況は、かなり危険な水準にまで落ち込んでいるのではないのでしょうか。

5. (1)①今の政治的、経済的指導層が腐敗して全くダメならば、さっさと引きずり下ろして、それに変わるべき新しい「エリート」層を見つけ、政権につけるべきです。
- ②企業経営も新しい「エリート」層に任せるべきです。
- ③あらゆる分野で指導層を替えるほかはありません。
- ④つまり、「模範性」を失ったらリーダーにはさっさと身を退かせて、新しい「模範性」を持った人びとと選手交代させるのです。
- (2)①もし、日本には新しい「エリート」層が育つ資質がなかったらどうしようかと心配する向きがあるかもしれません。
- ②しかし、そんなことはありません。わが国の歴史を一瞥^{いちべつ}しただけで、古今東西を通じて日本人の資質にはそうとう高度のものがあることがわかるでしょう。
- ③これは自惚^{うぬぼ}れでも自己満足でもありません。
- ④わが国は、世界中で、この点では、疑いもなく一目置かれているのです。
- ⑤その証拠に、至る所で「日本叩き」が見られます。それは、われわれ日本人の潜在的能力がなんとなく気になるからです。
- ⑥今のうちに叩いておくことが、自分の国にとって得だという戦略的配慮にほかなりません。
- ⑦日本人は、なにも卑下することはないのです。
- (3)①それにもかかわらず、今のようにわが国が世にも情けない状況に落ち込んだのは、われわれ日本人自身に重大な責任があります。
- ②それは、まさに「エリート」の存在そのものを、戦後やみくもには排撃したことです。まさに日本の社会の自殺行為でした。

6. (1) これからは「エリート」の志ある奇人な人びとを激励していきましょう。
- (2) 「エリートの意識」の復権を計ることです。
- (3) わが国は、今「自己沈潜」の時期にありますから、かつての「自己疎外」の一見華々しい時代の延長を期待するのは論外ですが、その代わり、重厚でしかも優美な新しい日本文化を創造するチャンスが生まれるかもしれないのです。

P266 ~ 271

<コメント>

「自己沈潜」の時代とは、「自分自身に沈潜し、新しい思想を生み出し、次の時代のために大戦略を用意する」時代だと考えます。

2025年4月2日、トランプ米大統領は、米国の方針として「相互関税」を導入することを表明。米国内も含め世界の経済秩序は一変しました。このような時こそ、「一喜一憂」「右往左往」することなく「自己沈潜」に徹し、新しい思想を生み出し、次の時代のために大戦略を用意する時代といたしましょう！

2025年4月14日(月)